２００６年８月３日　私は長居競技場に向かう間、特異な気持ちに包まれていた。
詳しくはコラム http://www.kasuriku.net/nomo/157.html 以降を参照していただきたいが、あれから３年経った今でも、私の人生の記憶に最も深く刻まれているイベントのひとつでもあった。

競技場へは地下鉄での移動になるので、土地勘のない我々にとっては少々難しかった。駅構内も迷路のようで狭いし、正直、翌年の世界陸上は大変だろうな・・・と勝手に思ったりもした。

地下鉄を出てから競技場までも大きな道案内もなく、矢印看板も無く、結構な距離を歩かされたのを覚えている。
気温は３５度・・・直前まで関東では３０度あまりなので、もしかしたら涼しいか・・・という淡い期待は、はかなくも裏切られた・・・。

そうしている間に運命の１００mが始まった。

前日、体調を崩し病院にまで行ったという後藤・・・インターハイのプレッシャーというのは想像を絶する。
当然、優勝を狙っているが結えのものであろう。

そうこうしているうちに、スタートが迫った。

心配とは裏腹に、後藤のフォームは素晴らしかった。
他の選手と比較しても圧倒的に安定した加速局面。
地面をしっかりと踏みしめ、キックした脚が流れていない素早い膝の動作が良く分かる。

４０ｍを過ぎたあたりからは、上体を起こしての動作に移行。
この時点で一気に差をつけていく。各地区を勝ち抜いたトップ選手たちを寄せ付けない。全く心配はなさそうだ。
先ずは一安心。

田中の８組には、優勝候補の江里口選手がいる。
順位としては２位狙い。しかし早実の小原選手も実績のあるスプリンターだ。

田中特有の低い姿勢からの飛び出し！
「おっ！悪くないぞ！」

３０ｍまでは小原選手に１０センチの差。

しかしここで江里口選手が出てきた！
やはり強い！

電光掲示板の速報を待つ。

「ああ・・・」惜しくも３位。プラスを逃したが、無風の記録としては決して悪くない。初めての総体１００m。
得意の２００mのアップと考えればいい。

いよいよセミファイナルがやってきた。
後藤は２組。各組２着プラス２だ。

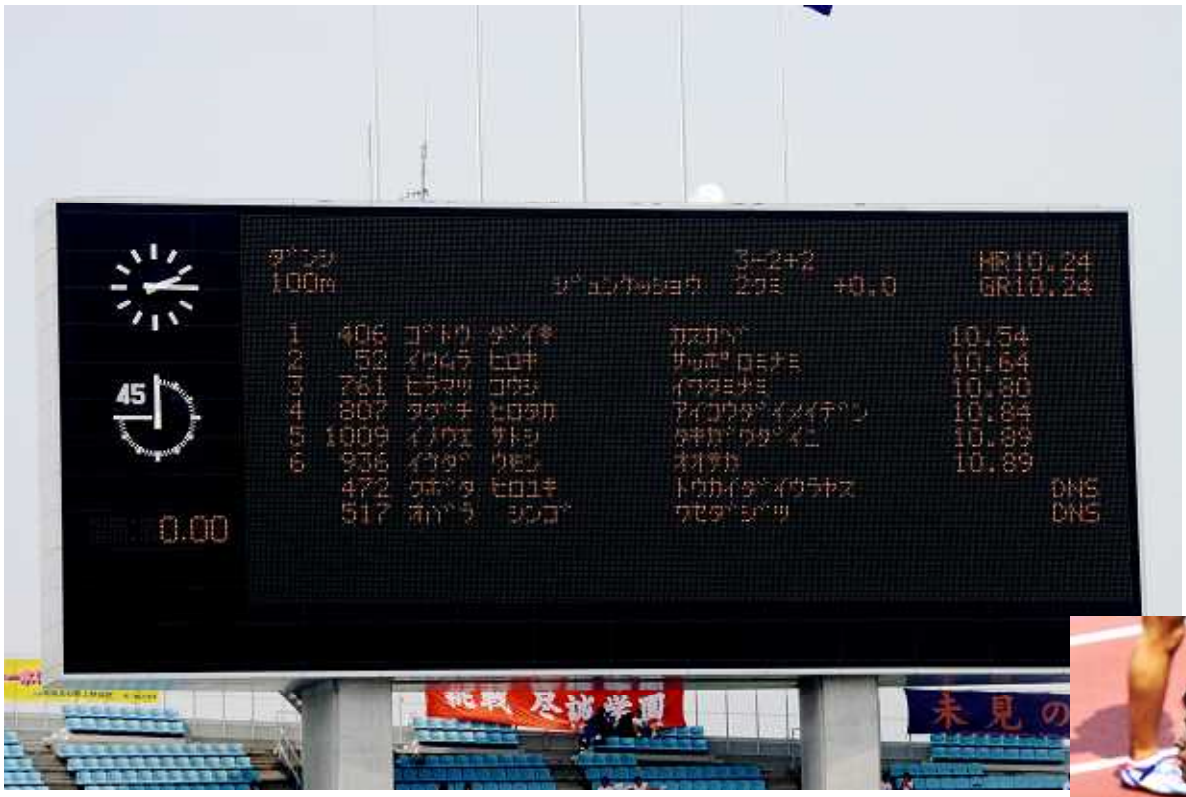
一組の速報はトップが１０秒６６。

いよいよ後藤の登場だ。

スタートはあっけなく始まった。
「あれ？」・・・というくらい余裕の走り。

北京のウサインボルトのごとく、完全に後半４０mはリラックス走り。

結果は今大会最高記録の１０秒５４。無風・・・！
「え！あの余裕で自己歴代２位？・・・流してる？」
本人は息すら乱れていない。
「これは東部の予選じゃない･･･インターハイのセミファイナルなのに･･･」
　自問自答して、ぞくっとした。



「勝てる・・・！」　不安は確信に変わった。

その２　決勝へつづく